

書くことが苦手な子



「LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド(2005)より」



ふみお君は書くことが苦手です。ひらがなやかたかなでは、鏡文字（例：「く」→「>」）や、似ている形の文字の間違い（例：「シ」→「ツ」）がたびたび見られます。漢字についても細かい部分での書き間違いがあります。

書くことが難しいのはなぜ？



推測されるつまずきの要因は？



形を正確に捉えることが難しい



形を正確に記憶することが難しい



目と手を協応させることが難しい

実態把握のポイント



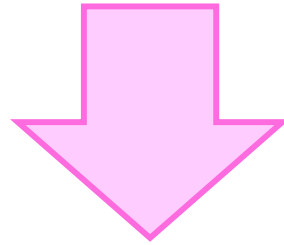
- 困難な領域だけでなく、同じ文字でも読む方はどうかについて把握する。
- 読みのつまずきが深刻な場合には、まず読みからアプローチする。
- どういう文字を間違えやすいかについてもとらえる。
- 丁寧に把握することで、子どものつまずきの要因を把握する。

考えられる指導方法は？



- ①鉛筆や消しゴムなど、使いやすいものを用意する
- ②マス目の大きいものや罫線のある用紙を用意する
- ③授業ではなるべくワークシートを使う
- ④文字を練習する際、言葉による意味づけを行う
- ⑤漢字テストなどでは、大まかに書けていれば正解、または準正解にする

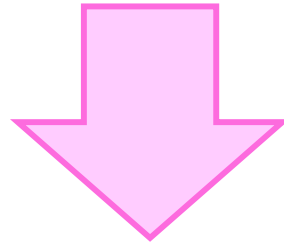
① 鉛筆や消しゴムなど、使いやすいものを
用意する



- 不器用さがある場合、用具に関する配慮は欠かせません。

例：鉛筆を使いやすいくするグリップ等
使いやすいボールペン等
大きめの消しゴム

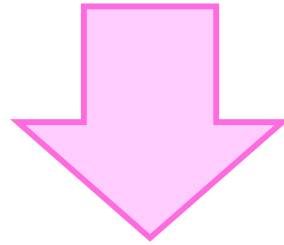
② マス目の大きいものや罫線のある用紙を用意する



- その子どもだけに特別のものを用意するのではなく、必要な子どもは誰でも使えるようにするなどの配慮が必要です。

例：記録用紙各種として教室に準備しておく、書きやすいノートとして全体へ紹介する等

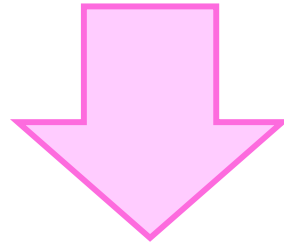
③ 授業ではなるべくワークシートを使う



- 書く作業の負担を減らすことで、授業内容の理解や、重要事項を考えることに集中できます。



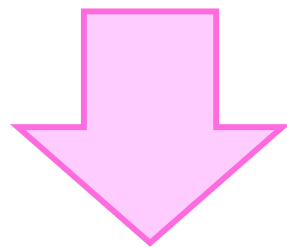
④ 文字を練習する際、言葉による意味づけを行う



- 言葉によって意味づけすることで、記憶する際の手助けになります。

例：「親」→「立って木を見る」
「『木』偏のつくものは、植物に関する字」など…

⑤ 漢字テストなどでは、大まかに書けていれば正解または準正解にする



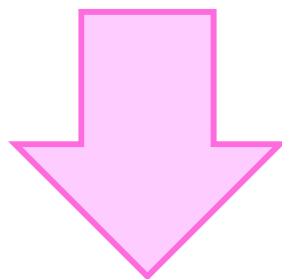
- 苦手意識を増加させたり、取り組みへの意欲を低下させないためにもこのような配慮は必要です。



より個に応じた指導



子どもにあった指導を考える際には、つまずきのパターンを把握することが大切です

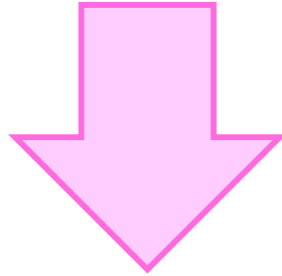


子どもが書いた
ノートやテストは有
用な資料！

例えば、漢字のつまずきでは…

- ① まったく思い出すことができない
- ② 細かい部分を書き間違える
偏と旁を逆に書く
- ③ 同じ音の漢字と間違える

① まったく思い出すことができない

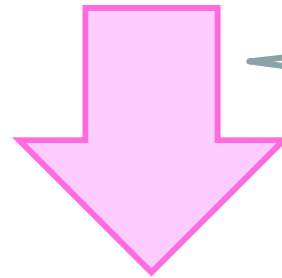


■ 記憶に残るよう、覚えやすい工夫が必要

☆ 漢字の成り立ちなど、付加的な情報も同時に伝える。

☆ 手先だけでなく、腕全体を使って書字の学習を行う。

② 細かい部分を書き間違える 偏と旁を逆に書く



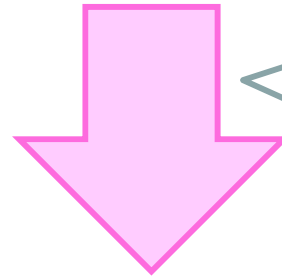
「東」 → 「束」

- 形についての記憶が曖昧なので、形に注目するような工夫が必要

☆ 一見形の似た漢字を示し、どこが違うかを指摘させる。(例: 漢字間違い探し)

☆ 語呂などで覚える。
(「日も月も明るい」 など)

③ 同じ音の漢字と間違える



「友達が言いました」



「友達が行いました」

- 漢字の読みは分かっているけど、意味の把握や、使い方について理解できていない

☆覚えさせたい漢字を含んだ文章を作成し、文単位で覚えさせる。

(例: 「**歌**が好きなお**姉**さん」など)

さらに…

□ 書字に関しては、運動面での問題が影響している場合もあります。その場合は繰り返し練習させることや、漢字を使うことを強要してしまうと、表現すること自体への意欲を失わせてしまうこともあります。指導の目標を明確にし、枝葉の部分は簡略化することも大切です。

☆パソコンや電子辞書の使用など



◇ 書くことが苦手な子どもは、怠けているから
苦手なわけではありません。

「書けない」ことを責める前に
「なぜ書けないのか」を考えて
あげてください。

そして、どうすれば書きやすくなるのかを
一緒に考えてください。

**勉強って
おもしろいね！**



書くことが苦手な子



終わり
担当：梅田 真理

「LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド(2005)より」